

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-27

着替えなど荷物を整理し終わると、真紀は部屋に鍵もかけずに女性大浴場に向かった。

湯船に体をゆっくりと沈めた真紀は、黄昏ゆく眼前の情景に目を細めた。

運転の疲れはなかったが、道中のやり取りや和紙工房での思わぬ出来事に精神的なストレスを感じていた。

横田が五代目のI氏に裸婦像の美術批評を託したくんだり、真紀には初耳だったし、写真を用意していたことすら知らなかった。

越前ガニを賞味するついでに和紙工房を表敬訪問するとばかり思っていた真紀は、意外な経緯に狼狽させられたし、クラブのママ以上でもママ以下でもない、男のまさかの距離感に悄然とするしかなかった。

I氏の高評価に感傷的になってしまった上滑りな振る舞いも含め、自省と悔しさと切なさでこぼれる涙を拭うように、女は長い黒髪をいつもより時間をかけて洗うと、鏡に映る顔に自嘲気味に笑いかけた。

真紀は気分転換を図るために、館内に展示されていた開高健の写真や色紙から、愛読したことのある何冊かの小説を想起していた。

つるべ落としの海景に漁火が見えている。

大樹の銀杏散るキャンパスで語り合っていた頃の青春が見えてくる。

一昔以上前の記憶を辿っていくと、数冊の作品の中から、旧西ベルリンに滞在中の主人公の中年作家が、昔の女の下宿先に転がり込んで怠惰な日常を送りセックスに溺れた果てに、ヴェトナム戦争の取材に人間回復を賭けようと旅に出るストーリーの題名『夏の闇』が、フラッシュバックのように蘇った。

アメリカ軍の中隊に同行させてもらい、激戦地のメコンデルタで生死の境界をさまよう体験をしながら、悪あがきと倦怠とエンドレスの殺戮の逃げ場のない暗闇で自己矛盾に陥る日々。

定宿にしているサイゴン(現ホーチミ市)のホテルのバーで、一見頼りないバーテンダーが作るドライマティーニの意外な切れ味に疲弊しきった魂を洗浄する一文。

精神的ストレスを女と戦場に委ねる男のむき出しなエゴ思考を、彼独自の文体で芸術の域に達せさせる力量は認めるとしても、繰り返しになるが、ある意味で上層階級の顧客を大勢相手にしてきた真紀にしてみれば、正味のところ、開高健といえども所詮は系列ごとに色分けされた範疇に属する男の内の一の一人として見なすこともできた。